

マラセチア皮膚炎

Malassezia Dermatitis

マラセチアとは脂肪を好んで栄養とする酵母様真菌です。この微生物は犬の常在菌で、皮膚炎を起こしていない犬の耳や皮膚、肛門などに絶えず見られます。

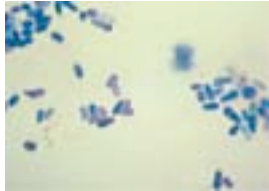
マラセチア皮膚炎や外耳炎が起こる場合は、この常在菌であるマラセチアが過剰繁殖するためだと思われれます。犬ではよく見られる病気ですが、猫での発症は稀です。

脂漏性皮膚炎とこのマラセチア皮膚炎の症状や治療が同じ効果をあらわすことから最近では同じ病気もしくは深く関連していると考えられています。

原因

犬の皮膚炎や外耳炎を起こす原因はMalassezia pachydermatis (マラセチア・パチデルマチス)の過剰繁殖だとされています。特にアトピー、食事性アレルギー、ノミアレルギー性皮膚炎、接触性アレルギー性皮膚炎、脂漏症などがあるとマラセチア皮膚炎が発症したり、悪化する傾向にあります。

また、副腎皮質機能亢進症、糖尿病、甲状腺機能低下症、亜鉛反応性皮膚炎などの内分泌疾患や代謝疾患でもマラセチア皮膚炎を誘発したり助長するといわれています。



症状

皮膚炎の場合、皮膚の発赤(赤くなること)、かゆみ、べとつきや乾燥が特に、口の周りや目の周り、指の間や爪周り、脇の下や内股、陰部などに見られます。また痒い為に舐めるのでこれら周囲の毛が赤茶けたり黒っぽくなる涎焼けという状態が起こることもあります。

症状が慢性化してひどくなると、ふけが多い、皮膚が厚くなる、脱毛、黒く色素が沈着するなどの症状も見られます。

外耳炎の場合は、黒茶色から黒っぽい過剰な耳あか、かゆみ、頭をよく振る、耳の周りを掻く、耳を触ると痛がるなどの症状が見られます。



診断法

問診、視診などと皮膚表面からセロテープ法などによりマラセチアを採取したり、耳あかを特殊な染色液で染めて細胞診を行い、その存在と数を確認します。

その他、真菌培養検査、皮膚の組織を切り取り病理組織学検査に出したりします。

治療法

皮膚の症状がひどい場合は、特殊な薬用シャンプー療法、抗真菌剤の投与などを行います。外耳炎の場合は、液体の抗真菌剤を点耳したり、内服薬を飲ませたりします。

ただし、前述のように二次的に起こっていることが多いので、一次疾患も同時に治療しないと再発を繰り返すことになります。

自宅での看護法

定期的なシャンプー、ブラッシングにより毛穴を清潔に保つこと。湿っぽい場合は乾燥を、乾燥肌の場合は潤いを与えるような工夫が必要です。

また、処方された薬はきちんと投与、塗布しましょう。中には治療が長期間かかるものや一次疾患の原因によっては治すというより定期的なケアをして病氣と付きあっていく必要があることもあります。

予防法

二次的に発症することがほとんどだと考えられるため、粗悪なペットフードを避ける、きちんとしたノミ予防プログラムを行う。定期的なシャンプーや被毛の手入れはあるていど効果があると考えます。

また、一次疾患の早期発見・治療は二次的におこるマラセチア皮膚炎の予防になるでしょう。

メモ

マラセチアは常在菌で絶えず存在する真菌です。ですからマラセチアが皮膚炎や外耳炎の原因というよりは、アトピーや食餌性アレルギー、ノミアレルギー、また内分泌疾患や代謝疾患などの一次疾患の治療にきっちり取り組まなければ再発を繰り返す可能性が高いものです。

治らない慢性的なマラセチア皮膚炎に大しては根本原因を追究し、その一次原因を治療する必要があります。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..